

巻頭写真 地域的絶滅が危惧される房総丘陵のヒメコマツ

An endangered population of *Pinus parviflora* in Boso Hills, Chiba, central Japan

ヒメコマツないしゴヨウマツと呼ばれる樹種には東北南部から九州にかけて分布し種子の翼が短いものと、北海道から本州中部の山岳に分布し種子の翼がやや長いものがあり、和名は図鑑によってまちまちである。ここでは、大井次三郎(1983)の『新日本植物誌顕花篇』に従って、前者をヒメコマツ、後者を変種キタゴヨウとする。

このヒメコマツが房総丘陵に分布している。島のような山塊の孤立個体群である。不規則に曲がった枝先に短い濃緑の針葉を密生するヒメコマツの樹形には独特の風格がある(写真1) 盆栽や庭木として好まれる所以である。そのせいで、房総でも1970年代までは実生や稚樹の採取が絶えなかった。それでも、かつては建材や炭材に使うほど豊富にあったという。ところが、1990年代後半から枯死木の無残な姿(写真2)が急に目立つようになった。プロ・ナトゥーラ・ファンドの研究助成を受け、2001年に我々が行った調査の結果、房総丘陵全域で生存個体数が80以下であることが判明した。しかも実生がほとんど見つからない。健全な個体群維持が困難な状態である。マツ材線虫病等、集団枯死の原因はさまざま考えられる。タイミングから考えると、94年夏の干ばつが引き金になった可能性もある。

そもそも大半が標高300m台の低山地で照葉樹林の発達する房総丘陵に、山地帯を分布の本拠とするヒメコマツが分布すること自体が不思議に思える。生存個体の半数以上が崖地に生育していることから、このような急峻な地形が個体群の存続を可能にしてきたのだろう。そうやって後氷期の1万年を温暖な房総丘陵で生き延びてきたのだとすれば、このヒメコマツ地域個体群は地球温暖化の影響を真っ先に受けているのかも知れない。

現在、東京大学千葉演習林、県有林、国有林、県森林研究センター、地元君津市、県立中央博物館、千葉大学、NPO等、千葉県内のさまざまな関係者が協力してヒメコマツ個体群保全に取り組んでいる。

(尾崎煙雄・大場達之 Kemrio Ozaki and Tatsuyuki Ohba)



写真1



写真2